令和6年度学校経営計画表

１ 学校の現況

学校番号	中学6	学校名	県立土浦第一高等学校 附属中学校	課程		学校長名	プラニク ヨゲンドラ
副校長名	日向 久	教頭名	淺野 洋平	事務(室)長名	諸岡 重彰		

教職員数	教諭	13	養護教諭	1	常勤講師	0	非常勤講師	1	実習教諭 実習講師 実習助手	0	事務職員	6 （兼務）	技術職員等	3 （兼務）	計	24

生徒数	中学校	1学年		2学年		3学年		4学年		合計		合計クラス数
		男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	6
		40	40	40	39	40	40			120	119	6

２ 目指す学校像

項 目	詳 細
生徒	・自分のことを理解し、人格形成を図り、自主的に多方面の知識と体験に触れ、物事について構造的に考え表現できる総合的な成長を目指す。 ・自己肯定感を持って主体的に行動し、思いやりを持って協働し、多様性を認め国際的視野を持てるような成長を目指す。
教員	・自ら仕事の効率化を図り、余裕を持ち職場や仕事の内容における改善を行うことで、WLB の向上を目指す。 ・常にリスキリングを行うことで、自身の成長から自己肯定感を強めて、得られた知識を同僚及び生徒に還元することを目指す。
学校	・国内教育のロールモデルとなる、日本一の学校を目指す。 ・整理整頓が行き届き、生徒が積極的に学べる場所、楽しく、安心して、やるべきことに集中できる場所を目指す。 ・プロセス、ガバナンス、危機管理、いじめ対応などについて徹底的な管理を目指す。
連携	・保護者、同窓生、地域、国内外の教育機関などとの連携を強化し、より良いより強い教育基盤の構築を目指す。

３ 現状分析と課題（数量的な分析を含む）

項 目	現 状 分 析	課 題
学習指導	高度で難易度の高い学習内容を求めて入学してくる生徒が多い。受動的な学習スタイルからの脱却を図り、主体的な学習スタイルを目指し、深い理解につなげている。一方、自信をなくしてしまう生徒もおり、学習のサポート体制の充実が大切である。	生涯の学びの土台を築くために、高校への学習スタイルの移行を丁寧に進めていく必要がある。学問本来の面白さに気付き、自ら学ぼうとする姿勢を育てるため、ICT等の活用も含め、様々な面から知的刺激を与える必要がある。

項 目	現 状 分 析	課 題
進路指導	難関の国公立大学や医学部への進学を希望する多くの生徒が入学してくる。OBOGとの交流機会を多く持ち、将来の職業を考える取り組みを大切にしている。生徒自身の将来の希望をかなえるため、海外進学オリエンテーションなどを含めさまざまな取り組みを行っている。	自分の適性を知り、職業を知り、進路目標を持つ。学年ごとに段階的な指導をしていくことで、将来の進路を考える機会をより多く提供する必要がある。学習内容、行事などの実践的な意味を理解し、自己肯定感や達成感を持てるようにする。
生徒指導	基本的生活習慣が身についた生徒が多く、安全・安心に学校生活を送れる環境にある。一方、登下校時の自転車の乗り方やバス乗車のマナー、さらにSNS利用について、指導する機会が増えている。	成人年齢が 18 歳に下げられ、これまで以上に高校段階で知っておかなければならないことが増えている。また、HRや授業、集会等を通し、いじめ防止に関する丁寧な指導がより大切になる。
特別活動	文化祭、体育祭などの学校行事が生徒主体で企画運営されている。集団活動を通して得られた達成感・自己肯定感は、何事にもかえがたい貴重な財産となっている。	活動内でのいじめ、同調圧力を防止するための策を講じる必要がある。部活動では、外部顧問を増やし、教員の負担を減らすのと同時に、専門的な指導を導入する必要がある。生徒数が減ったため、部活動の在り方を改めて考える時期に来ている。
働き方改革	昨年度時間外在校等時間における月平均は36時間22分、月45時間超過者は35%、月80時間超過者は1%であった。少数ではあるが生徒指導対応、また、魅力ある行事をつくりあげるためとはいえ、教員の働く時間は長く、採点の負荷なども多い。	AL 型教授法の強化など授業改善の工夫が必要である。考査、採点の在り方についても、作問検討会の改善や採点ナビの有効活用など、様々な工夫が必要である。

4 中期的目標

項 目	詳 細
生徒	・自己分析、進路意識の育成：個人面談、キャリアガイダンスをより充実させ、生徒一人ひとりの高いレベルでの自己実現に向けて進路指導を強化する。 ・自ら学ぶ意欲の喚起：学力向上に資する特色ある教育課程を編成し、思考力・判断力・表現力等を育むために、より効果的な教科指導を実施する。 ・健全な心身の育成：専門家による講演会、特別活動を充実させ、部活動・学校行事等を通して、自主自立の精神を培い、豊かな人間性を育む。 ・教育相談の充実：生徒の心情への理解を深め、より適切な指導・助言のあり方を探る。 ・グローバルリーダーの育成：独自の探究活動を展開し、世界の舞台で活躍できるリーダーの育成を目指す。
教職員・学校組織	・周辺の変化を意識：周辺が変化するスピードに惑わされず、自らの作業工程を分析し、常日頃の改善を工夫する。 ・働き方改革の推進：教員の心身の健康維持とWLBの向上に努めると共に、時間的・精神的に余裕のある教育活動を展開できるよう努める。 ・ベストプラクティスの共有：管理職・校務部・学年・教科間でベストプラクティスを共有し、互いを尊重し、学校全体の成長を目指す。 ・失敗を恐れない精神：全てのことに積極性をもって楽しく取り組む。失敗から学び、次に活かす。先ずは、考えてみる、やってみるという精神を構える。 ・生徒ファーストの推進：教職員の WLB に配慮しながら、生徒の目線に立った指導を心がけ、何事においても生徒のメリット・利便性を優先して進める。
学校全体	・信頼関係の育成：教師と生徒の信頼関係を深め、心の居場所が確保出来る学年・ホームルームを運営する。 ・ICT活用の推進：授業改善を目指すと共に、生徒や教職員の情報活用への興味・関心を高める。タブレット等を駆使した教授法の研究や展開に努める。 ・中高一貫校の推進：高校と附属中学校が連携・協力し、互いの良さを学校の活力につなげ、生徒の一貫した育成につなげていく。 ・本校魅力の発信：入学希望者を増やすために、学校のHP・通信等を更に充実させ、本校情報を積極的に配信し、地域との連携を強化する。 ・管理体制の明確化、プロセス、ガバナンス、危機管理、いじめ対応などについて徹底的な情報共有・管理を目指す。

5 本年度の重点目標

重 点 項 目	重 点 目 標
①高い志（＝信念・厚意）の育成	① 高い「志」を持ち、常に前向きに努力し続けることにより、自分の進路を自ら切り拓いていく態度を育成する。 ② 生徒の自己理解を促し、高い目標設定と絶え間ない努力ができるよう、個別面談の充実を図る。 ③ 将来において、各界でのリーダーを目指すべく、各個人の可能性を伸ばせるように支援する。 ④ 学びのプロセスを記述するキャリアパスポートの活用、キャリア教育、進路支援等を通じて生徒が自ら進路を拓く。
②自己理解による主体的学習態度の育成	⑤ 授業に対する意欲と理解を高め、自主的・積極的な学習態度を育成する。 ⑥ しっかりしたタイムマネジメントと主体的に学ぶ姿勢を育て、効果的な学習活動を支援する。
③授業改善（AL 型授業展開等）による生徒の理解度向上	⑦ 指導法の研究を各教科で行い、深い学びの提供に努める。各授業において、導入～授業～再確認という流れをつくる。 ⑧ 研究授業の開催、相互授業参観、先進校視察や校内研修会を通して、授業改善及び指導力向上を図る。 ⑨ 生徒による授業満足度 3.2以上を目指す。
④豊かな人間性の涵養による心理的安心の向上	⑩ 基本的生活習慣の確立に努めるとともに、部活動や委員会活動への積極的な参加を促す。 ⑪ いじめを許さない心や、他者を思いやる心の育成により、豊かな人間関係づくりを図る。 ⑫ 個別面談や教育相談を充実させ、生徒の悩みや問題の解決に向け支援する。
⑤探究活動・他校交流・大会参加等を通じて自己肯定感の向上	⑬ 普通・DX 探究活動を強く推進し、課題発見、課題分析、課題解決能力の育成を図る。 ⑭ 自ら調べ、考え、発表する 姿勢を育て、主体的、対話的な深い学びにつなげる。 ⑮ 世界に通用する人材育成ができるよう、コミュニケーション能力、英語による発信力強化を図る。 ⑯ 国内外の大会、模擬国連などに積極的に参加し、グローバルな視野の育成を図る。 ⑰ 国内外の有識者による講演会、様々な背景を持つ生徒との交流などを積極的行い、生徒の自信育成につなげる。
⑥学校情報の積極的発信と保護者・同窓生・地域との連携	⑱ 学校の情報を積極的に発信するために学校ホームページや学校通信等を充実させ、本校の魅力を伝える機会を増やす。 ⑲ 地域とのコミュニケーションやふれあいの機会を大切にし、小中学校や近隣の方との交流を図る。
⑦中学生と高校生の積極的交流の推進	⑳ 授業・部活動・探究学習などの内容を段階的に身に付けられるように、効率的な連携を工夫する。 ㉑ 附属中において人格形成、課外活動、言語能力などに重みをおき、総合的な学びを図り、高校での学びの基礎とする。
⑧ICT 機器の活用などによる効果的授業の実現	㉒ ICT 教育を強化し、ICT機器の効果的な活用を通じて、生徒の学習理解を幅広くサポートする。 ㉓ 授業改善を考える手立てとして、先進的な事例紹介等の機会を増やし、研修の充実を図る。
⑨働き方改革の推進による WLB 向上	㉔ 学習指導等の質の向上を図りつつ、業務の効率化を進める取組を推進することで、職員の負担軽減、環境改善を図る。 ㉕ 在校時間の自己管理や休暇が取得しやすい環境づくりを推進し、働き方の意識向上に努める。 ㉖ 衛生委員会等で超過勤務・ストレス等を把握し、課題の改善・解決に向けて取り組む。